

## 巻 頭 言

この巻頭言を執筆するに当たり、過去の『教育論叢』を手にとることにした。そこには、これまでの先輩方による院生同士の学びあいの足跡が残されていた。その論文や論稿は、院生同士の助言や検討会の中でつくられたものであり、そこには「研究とは何か」「論文とは何か」という院生の問いが絶えず渦巻いているように感じられた。そして同時に、こうした院生同士の学び合いの場が1958年の『教育論叢』創刊以来、現在まで続いていることに改めて驚かされる。

大学への競争原理の導入や大学院生の就職難の中で、院生の教育研究環境の中にも競争原理が持ち込まれつつある。こうした状況において、業績を重ねることが重視され、「研究とは何か」という基本が忘れられつつあるのではないだろうか。研究者の卵である大学院生の時期に、そうした問いを立て、考えを深めることはとても重要なことのように思う。そして、『教育論叢』はそうした院生同士の研究についての価値観を交流・深化させる場としての役割も果しうるものであると考えている。

近年、大学院生の増加に反して執筆希望者が少ないこと、そして『教育論叢』検討会への出席者が少ないことが問題として挙げられてきている。このことは、ひとえに編集長である私自身の力不足でもあり、深く反省するところであるが、今一度『教育論叢』という場の持つ可能性や意義について、大学院生全体で問い直すことが必要とされているのかもしれない。

近年の『教育論叢』は、博士課程前期課程の院生の執筆者が多かった。『教育論叢』は、前期課程院生にとっては数少ない論稿の投稿の場であり、修士論文執筆へのステップとして有効なものである。同時に、後期課程院生にとっても、学会誌や紀要に投稿する前段階として、あるいは博士論文執筆に向けての大胆な仮説を展開する場として、有効に利用できる場であると思う。また、前期課程・後期課程問わず、他領域の研究の視点・方法を学べる重要な機会でもある。互いの研究方法を押しつけあうのではなく、互いの良い部分を交流し、取り入れていくことが必要であろう。その他にも『教育論叢』の持つ可能性はたくさんある。それらの可能性を活かせるよう、来年度以降も『教育論叢』が発展していくことを願ってやまない。

本誌は、例年通り院生同士の検討会や助言を通して完成した。執筆者及び私たち院生自身の未熟さゆえ、ここに掲載された諸論稿にも十分でない点が見られるかと思う。しかしながら、『教育論叢』の執筆を通して執筆者自身が自らの課題に気づき、今後の自分の研究の糧としてもらいたい。執筆者がそれらの課題を今後乗り越え、より深化した研究活動を進めていけるよう、多くの方々のご批判・ご批評をいただければ幸いである。

2010年2月

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻

『教育論叢』第53号編集委員会 委員長

富 樫 千 紘